

■第3章－概説■

難波の新政権は、孝徳（こうとく）天皇の崩御によって10年もたたずに崩壊しました。

653年、斉明（さいめい）天皇が飛鳥で即位しました。

斉明は、夫である舒明（じょめい）天皇の事業だった百済大寺（くだらのおおでら）の造営を引き継ぐとともに、弟である孝徳天皇の後を継いで、四天王寺の伽藍整備を継続したようです。

660年、唐と新羅（しらぎ／シルラ）の攻撃によって百済（くだら／ひゃくさい／ペクチェ）が滅亡しました。

同年12月には、百済復興の救援軍派遣のため、難波で軍備をととのえ、斉明天皇自らが兵を率いて筑紫へ向かいますが、筑紫朝倉宮（つくしあさくらのみや）で崩御してしまいました。

文献によると、四天王寺塔内の大四天王像は越（おち）天皇のために奉納されたとあります。

越天皇とは斉明天皇のことで、四天王には外敵から国を守るといった意味が込められていたという考えもあります。

また、金堂の弥勒菩薩像（みろくぼさつぞう）が天智（てんち）天皇によって献納されたと書かれています。

天智天皇の供養には、母の菩提を弔うとともに、西方の敵たる唐や新羅から国を守るといった意味も含まれていたと考えられます。

日本書紀によると、664年、前年の白村江（はくすきのえ／はくそんこう）での大敗によって帰国できなくなった百済の王族らを難波に居住させたとあります。

百済の王族らは、のちの持統（じとう）天皇の時代に「百済王」（くだらのこにきし）という姓（かばね）を与えられ、中央政府で活躍する有力氏族となります。

その居住地の有力候補が、「難波百済寺」に比定される堂ヶ芝廃寺（どうがしばはいじ）です。

堂ヶ芝廃寺は、四天王寺と同範（どうはん）の軒丸瓦が出土しており、四天王寺の伽藍整備と、百済王氏の氏寺・難波百済寺の造営は同時期に進められたとみられます。

外敵調伏（ちょうぶく）の性格をもつ四天王寺と、氏寺として整備を進める難波百済寺は、百済系渡来氏族にとっての精神的な支えで、大切なシンボルであったと考えられます。